

キリシタン時代のカテキズム教育の宣教的効果と今日の意味

辻井玲子

I、序 論

日本宣教史上には二つの宣教の時代がある。大きく分けて、一つは戦国時代のキリシタン時代、さらには鎖国が終わった明治維新以降のプロテスタントを加えての時代である。キリシタン時代は、短期間で多くの名もない民衆が信仰を持ち、さらに迫害期にあつてもその信仰を守り抜いた日本宣教史上希有の時代である。そこにその時代特有の背景があつたとしても、これほどの成果をあげた時代はない。当時の日本宣教の中心であつたイエズス会の活動を見てみると、教育事業に力を入れていたことは明らかである。それは主にこれまでセミナリオ、コレジオなどの学校教育事業の評価に偏っていた。しかし、同時に民衆に対して地道な教育活動が行なわれていたことを見落とすてはならない。そこでこの小論は、イエズス会のなした主に民衆の信仰成長教育の「教育のわざ」に焦点を当て、その中でもさらにその中心手段として用いられた「カテキズム教育」について取り扱う。原史料をもとに、宣教的手段としてなされた当時の「カテキズム教育」の様子、またそのカテキズムが宣教者の神学的・宣教的意図にそつ

て編纂されていく様子を確認し、「カテキズム教育」が宣教的な枠組の中で、いかに方法面においても内容面においても補充・深化・統合したものであったかを確認したい。また当時の信仰共同体としてのコンフラリアとの関係を考察しながら、「カテキズム教育」が「教会」という信仰共同体の一員としての信徒の信仰成長、信仰継承にいかん効果的に働いたかを明らかにしたい。なぜなら、「カテキズム教育」は、この世における「今、ここで」「今だ、尚」に存在している信仰共同体としての教会に属する多様な個々の人間を、一つの凝縮した信仰へと統合する意味で大きな役割を果たすものであるからである。

今日の教会では、クリスチャン人口がなかなかパーセントを越えず、信仰を持つても教会生活から遠ざかっていくクリスチャンが少なくない。「脱教会体験」は五割を越し、その原因の第一位は「本人の信仰の問題」であるとされる。⁹⁾ このような脱落者を防ぐために、日本のクリスト者の背景から、信仰確立の問題が急務であり、受洗後の教育の大切さが叫ばれている。その意味で、最後にこの小論を通して今日の教会における「カテキズム教育」の再評価をなして、その重要性を強調したい。

II、キリシタン宣教におけるイエズス会パードレの宣教姿勢とその手段

キリスト教の最初の日本宣教は、一般的に一五四九年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島を踏んだことに始まる。概数であるが、その教勢を信者数で追ってみると、一五七〇年(元龜元年) 二一三万人、一五八一年(天正九年) 一五万人、一五九〇年(天正一八年) 一三二四万人、一六〇〇年(慶長五年) 三〇万人、となっている。¹⁰⁾ 一五八七年の関白秀吉の「伴天連追放令」までは約三〇数年、さらには一六一二年の一キリシタン禁

制」までで六〇数年の間がキリシタン宣教の中心的な期間である。わずか数十年である。その間に急成長をしていることが分かる。その後の大迫害の時も追手を逃れ、キリシタンはその信仰を守り抜いていった。時折、密告者が出ていくこともあったが、徳川二六〇年その信仰を守り抜いたその子孫が、明治になってカトリックの司祭の前に姿を表わしたのはよく知られていることである。¹¹⁾

このような短期間の効果的な宣教要因として、よく語られるのが時代背景である。確かにこの一五〇〇年代は、日本が中世から近世へ移る変化の世紀であった。しかし経済的、政治的、社会的変化にとんだ世紀ではあったが封建的な土壌は弱まるばかりか、かえって強められる結果となった。多くの農民たちは、隷属化することを余儀なくされていくことになる。新しい封建権力者になった者たちは、実力闘争の世に打ち勝っていくために果てしない権力争いを繰り返すことになり、農民は打ち続く戦乱と収奪によって過酷な状況に置かれていった。不作、貧困が人々を襲い、餓死をする者も多かった。近代的な芽生えはあるにはあったが、そこに重要な近代的精神、人間性の自覚、人格の尊重、自由の追求が著しく微弱であった。しかし、当時の精神的、宗教的基盤であった仏教界もそれを支え、人々を導く指導性に欠けていた。一般的には仏門は腐敗し、貴族的享楽に走り、自ら武装して戦乱の中に身を投じ、人々に安心立命を与える存在ではなかった。物質的にも精神的にも救いを待望する庶民の思いは強く、その心は飢え渴いていた。¹²⁾ そこに、イエズス会が現われた。彼らによってまったく新しい人間観、世界観が示されたのである。

イエズス会は、ルネッサンスを背景に、対抗宗教改革の旗頭として、一五四〇年に創設され、「神のより大きな栄光のために」キリストの遺命に従い、教会設立のために命を投げ出す戦士の集団であった。新しいグループであったが、教皇のもとにカトリックの公同性をその宣教を通して世界に適用したグループであったといえよう。

イエズス会の大きな特徴は、政治的融通性、ないし適応性であったと言われる。それは、彼らにとつた教育・科学的活動の実績が何よりよく明示している。彼らは退廃した中世教会を「説教」と「心靈修業」とによつて覚醒させる一方、青少年の組織的な教育に力を入れた。宗教的目的のみならず、一般教育をもめざし、教養・学問・技芸を身に付ける初等学校・セミナーヨ・コレジヨを各地に設けた。

彼らは当時のかなりの知識人であり、同時にルネッサンスの栄光に包まれて来日した人々であった。そして、宣教のためには何でもするといった性格から、プライドと共に過激な部分も持ち合わせていた。現実には彼らの宣教については賛否両論がある。しかし、特に極東における彼らの宣教態度は、宣教地の政教事情、文化、習俗の研究、理解と、それへの適応という彼らの良い面が出ていたと言われる。⁹⁾

そのイエズス会最初のパードレ、フランシスコ・ザビエルの日本宣教の姿勢の中に、日本におけるイエズス会の宣教姿勢の原型を見ることが出来る。彼は、終始日本人を高く評価し、一般庶民に対し、深い愛情を持ち、賞賛の言葉を惜しまなかつたと言われる。¹⁰⁾そして日本における宣教が文化的、教育的、論理的、科学的であるべきであるとした。また日本人を論理性、文化性においてヨーロッパ人にも勝ると評価し、この高度の文化圏に適応するために研究を重ね、文化と習俗とを尊重し、それとの一致に努めたのである。¹¹⁾このような深い理解と愛情があつたからこそ、自ずから宣教手段にもその姿勢が現れてくることになるのである。

すなわち、彼の人的な手段方法としてみえるのは、彼が日本の国土を实地に踏んでその風習に従うことにより、それらを我身につけたということが挙げられる。彼がその手段としてとつたのは、第一として言語を習得すること、第二に、その土地にいない者でも利用できる方法、すなわち信仰の玄義についての書物や解説を整えること、第三として、君主に布教の許可を求めたこと、第四として、異教の仏僧たちとできうる限りにおいて友好を保とうとし

たことなどであつた。¹²⁾

その後、いろいろなパードレによつて多少の宣教方針の違いはあつたとしても、その基本線は崩されてはいない。¹³⁾その中でも傑出した人物は、巡察師ヴァリニャーノであつた。彼は、オルガンチーノのような極端な日本賛美ではなく¹⁴⁾、現実を正しく捉え、なお日本人を評価した人物である。ザビエルの宣教姿勢を受け継いだパードレであつた。彼がとつた「司牧」のための適切な方法とは、「イエズス会自体、並びにキリスト教徒の維持、増大を常に目標として定め、生じる事情、機会、時期に応じて、イエズス会自体とキリスト教徒を思慮深く必要な型に順応させるよう努力する」¹⁵⁾といつたものであつた。すなわち日本の諸事情をよく考察した上での「適応・順応」方針である。¹⁶⁾しかし、それは往々にして批判される、埋没型の「適応・順応」ではない。ヴァリニャーノは、ヨーロッパの諸思想よりも正統的なキリスト教信仰そのものを導入しようとした。それは信仰そのものが、思想から生まれるものではなく、思想は信仰によつて導かれるという本質的性質を理解していたからである、と井手氏は考察している。¹⁷⁾その一つの例としては、彼は多くのヒューマニズム的書物は日本語にあえて翻訳、印刷しなかつた。ヨーロッパには良い思想もあるが、彼らをキリスト信仰から離してしまう恐れのある書物もたくさんあつたのである。それをヴァリニャーノは極めて厳しく選択して日本に持ち込もうとしていたのであり、思想ではなくキリスト教信仰に繋がるものを与えようと努力しているのである。

また、ザビエル以来、異教の仏僧とも出来るだけ友好を保とうとしたのは前述の通りであるが、決して迎合したのではなかつた。むしろその仏僧と絶えず論争をしているのである。最初は好意的であつた仏僧たちもパードレたちが、その神々との違いを強調するようになり、民衆がその教えに耳を傾けるようになるやいなや、迫害者と變わつていった。しかし、そのような中傷や嫌がらせがあつても、彼らはキリスト教の本質については譲らなかつた。

そしてこのような論争を経たからこそ、イエズス会はさらに日本の諸宗教を深く知ることとなり、福音を他宗教と明確に区別しつつその独自性を明らかにすることができたのである。

III、カテキズム教育への意欲

「適応・順応」、「キリスト教の本質の徹底化」、さらにイエズス会の本来の宣教体制に方向性を持たせた現実の一方の方策は「教理教育」であった。彼らはヨーロッパにおいてもそれを徹底させたが、「教理教育」が日本においても、どのように徹底的であったのかを以下に見ることができる。

当時のイエズス会通信を見ると、「新たにかの人人々に説教や教理教育を行なった」¹⁰⁴というように、「説教」と「教理教育」という言葉がいつも隣り合わせになって記述されている。また「ついには公然とミサや説教に与りにやってきたし、教理問答から再構成した講話を聞きにもきた」¹⁰⁵とあったり、「教理の説教」¹⁰⁶ともある。異教の人々を改宗させるために、彼らははっきりと教理問答を用いているのである。フロイスの「日本史」においても同様である。

教理教育が、いかなる場面で用いられているかについては、いろいろな記述がある。

第一には、教理教育が洗礼前になされていた。伝道のためにはある。一私はさらに彼女が自らの隣人である多くの異教徒たちに教理問答を聴くよう説得してきたことを知った¹⁰⁷とある。また、洗礼への準備となっていたことは明らかである。「それには、土地の重だつた幾人かの仏僧が同じように教理をすすんで聴聞し、やがて改宗した……」¹⁰⁸「教理を聴聞し洗礼を施されると」といった記述もある。

教理を知っていることが、洗礼への道となっていたことも伺い知ることが出来る。「……彼ら（に対して）は、受洗に先だつて、（キリシタンの）祈りを知っているかどうか、また（これから）受入れようとする教えと、棄てようとする（今までの）教えについて（よく）理解しているかどうか大いに試されたからである」¹⁰⁹とあり、また「ところで受洗するに先立って、ドン・バルトロメウは、彼らに向かつて、『御身ら御一同、ドチリイナ・キリシタンを御存知なれば、それを暗誦なされい』と命じた」¹¹⁰ともあるようにである。教理がしっかりと学べていなければ、洗礼を授けないといった厳格な姿勢があつたようである。¹¹¹

洗礼に至る道が長く険しかったのは、以下のような記述にも見られる。一五六四（永祿七）年三月六日付のフロイスの書簡に「洗礼の準備段階」という報告がある。ここにおいて、洗礼については五段階を踏むようになっていゝる。一つ一つに区分が設けられ、一つずつ納得して進むようになっていゝる。第三段階までは異教の論駁に費やされ、準備教育を施したのは、適当に信徒を生み出すことよりも有能で信頼のおける信徒を「異教の地」に生み出したと思つたからである。上からの集団改宗をした人々へも同様に十分な教育がなされていた。¹¹²第二には、洗礼後においての教理教育である。これについても多くの記述がある。そこにあまり明確な区別はないが、至るところで教理が用いられていることは明らかなことである。ジョアン・フェルナンデス修道士の当時の姿が「（彼は）ミサを聴いた後は、午前一一時に（を）授かれるように）教理を教える（仕事）に従事した。彼は食事が終わると、さつそく子供たち（のため）のキリシタンの教理（教育）を継続したり、（それより先ずで）始めていた求道者たち（のため）の授業を続行した。……」と書かれているのである。¹¹³学ぶ側も熱心であつたために、「これらのキリシタンの大部分は教理を（よく）知っています」とも書かれている。¹¹⁴このように、教理教育を徹底させることで、

人々を教化し、さらには世界観を再編成させ、カトリック教会を日本においてたてあげようとしたのである。

IV、カテキズムの編纂

この徹底した教理教育の基本となったのが、「カテキズム」である。カテキズムは、受洗志願者に受洗の決断をさせ、受洗者には信仰の基盤を作るためには最適であった。さらに、キリスト教徒の信仰の在り方、生活の在り方を示す書物としてもカテキズムは用いられていた。⁽²⁴⁾

日本に初めてカテキズムが現われるのは、やはりフランシスコ・ザビエルに遡る。彼は、日本の宣教計画を立てる段階で、すでに教理教育にも思いを巡らせていた。⁽²⁵⁾ ザビエルは最初、ポルトガルで出版されていたバルシユのドチリナを用いたとされる。これは教理の説明書ではなく、彼が児童教育のために編集した文法書の付録であったようである。その付録には、キリスト者が暗誦すべき祈りや十戒などが三三か条にまとめてあった。ザビエルは、それをインドの実情に合わせ、改訂している。必要でないと思つた部分、特にラテン語の祈りを切り捨て、そのかわりに一〇か条を付け加え、二九か条としている。この二九か条は、ザビエルが最初に宣教した、鹿児島、市来、平戸の新しい信者団に残したものである。しかし、この翻訳はかなり未熟で、宗教用語もすべて仏教語であつたため、ザビエルはそれを山口で改正したとされる。キリスト教的神概念保持のためにラテン語の「デウス」を用いるようになったのはこれに由来する。

さらに一五五二年に来日したガウゴ(P. Ballinjar Gago, S.J.; 一五一一一五八三)によって用語の改正がなされることとなる。それで五〇ほどのキリシタン用語を決定している。そのような用語改正に伴つて、ザビエルのカテキズムをやめて、新しいカテキズムを用いるようになっていく。それは一五五五年、インドの管区長ヌニエスが編集させたドチリナである。これは、ザビエルの二九か条を二五か条に編成し直したものであると言われている。⁽²⁶⁾ すなわち、二、三の短い祈禱文を、あるいはのぞいたり、あるいは一条にまとめたりして、全体の訳文を改訂したものである。それゆえ一五七〇年代に至るまでの諸資料に出てくるドチリナはザビエルの二九か条か、ヌニエスの二五か条かの簡単なカテキズムであつたと言われている。一五六一年の「日本史」にはすでに「どちりいな・きりしたん」という言葉が出てきている。⁽²⁷⁾

さてこの頃、ヨーロッパにおいては、イエズス会が新しいカテキズムの作成にかかつていた。それは「ジョルジュの公教要理」である。⁽²⁸⁾ 特徴としては、対話方式を取り入れたこと、次には、それが児童用の教材であつたために、神学的な説明や論議に入らず、根本的な教義をわかりやすく、また覚えやすく説明しようとする力注いでいる所であろう。これはあつという間にベストセラ一となり、さらには二一三年の内にインド、東南アジアにも送られ、訳されたのである。

それが日本にも一五七〇年代にカブラル(Francisco Cabral, S.J.; 一五三二一六〇九)の来日前後に入ってきた。これがザビエル以降のカテキズムに転換点を与えた。すぐさま翻訳されるが、最初の訳文はかなり不完全なものであつて、原文をそのまま生硬に日本語に訳したとされる。さらに、それは文章的に磨きをかけ、内容について特に大入用のカ所をおぎなう必要があつたが、ともあれこれを公式の教理書と定めたのはカブラルであつた。⁽²⁹⁾ また一方において、ロドリゲスは「日本教会史・下」において、カブラルの関係した別の詳しい公教要理について次のように述べている。「これは(二二五か条は)、一五七〇年代にパードレ、フランシスコ・カブラールが日本に行くまで使われた」。カブラルは前述のジョルジュの分を持ち込んだようだが、一方で「信仰の玄義について詳しい公教

要理を著わし、同時に異教徒の諸宗派に反論を加えた」ともある。日本史にも「すなわち、(カブラル)師が、異教徒に説くために(作成を)命じておいた教理の解説書が、(以前のものよりも)奇麗に、かつ修正された日本語で当時、著わされるようになった」と書かれている。⁸⁰ここで述べるカブラール作成の公教要理は、ジョルジュのものとの翻訳本とは異なる。むしろこれは、後で述べる「日本のカテキズモ」に近いものであったと推測される。⁸¹ただこれらの教理書の編纂が単独でなされたのではないことは、カブラルがザビエル以降の教理書を編集しつつ、一方で「ジョルジュの公教要理」を翻訳、編集していることから分かる。またカテキズムが、日本の実情にあうように短期間で何度も書き換えられていることに気づかされるのである。

V、「日本のカテキズモ」と「ドチリイナ・キリシタン」

(1)「日本のカテキズモ」

日本におけるカテキズム編集の一方の流れの最終点ともなった「日本のカテキズモ」は一五八〇年、一二月ごろヴァリニャーノによって書かれている。⁸²彼は第一次巡察の時、一五七九年七月二十五日に日本に着き、それから二年七月日本に滞在している。その滞在中、日本に来て約一年の間に「日本のカテキズモ」を仕上げている。⁸³個人の才能もかなりのものであったであろうが、カブラルの働きやそれまでの日本からのさまざまな文書、報告書から、そしてやはりそこにザビエル以降の日本の諸宗教に対する深い探究、カテキズモの作成があったからであると推測する。なぜなら、ザビエルの命令によっての教理教育の内容の記述が「日本史」に見られる。

メストレ・フランシスコ(ザビエル)師の命令によって、日本で異教徒に(キリシタンの)教理を教えた

方法は次の通りであった。まず彼らに証明するのは、世界万物の創造主が存在すること、世界には初めがあつて「彼らのある人が信じるように」永遠のものではないこと、太陽や月は、彼らの神々ではなく、またいずれにせよ生物ではないこと、さらに靈魂は肉体から離れた後も永久に生き続けること、理性的な靈魂と感性的な靈魂との間にはいかなる相違があるか、この相違は彼らが知らぬことである等であつた。それらが理解されると、こんどかれらのうちの幾人かが提出する幾多の難題や、彼らが自然現象に関して発する質問に答弁がなされる。次に彼らに日本の(諸)宗旨を説き、おのおのに、ことにその人が信じている宗旨のことを(話し)、彼らがそれまで聴聞したことと比較して、両者の違いを判らせるようにする。そして明白な証拠をもつて彼らの説を反駁し、各宗旨の誤謬を示さねばならぬ。彼らがそれを理解すると、各人の理解力に応じて三位一体の玄義、世界の創造、ルシフェルの墮落、アダムの罪について述べ、それからデウスの御子の現世への御出現に説き及び、その聖なる御苦難、御死去、御復活、御昇天、十字架の玄義の力、最後の審判、地獄の懲罰と天国に迎え入れられた人々の幸福のことを説明する……。⁸⁴

内容を整理してみると、以下のようになる。

- ① 世界万物を創られた神・創造主の存在について聞く。
- ② 自分の疑問について質問する。
- ③ 日本の諸宗旨について説き、両者の違いを分からせる。
- ④ 明白な証拠を持って論駁する。
- ⑤ その後キリスト教の教理を教授する。

これはまさに、この「日本のカテキズム」の流れに沿っているのである。

「日本のカテキズム」の構成は、第一巻、第二巻に分かれる。第一巻では、知性を備えた唯一の「根元者」の存在について述べる。その際、日本人の陥っている間違った教義について、まずその教義を明らかにしたところで、それへ論駁を加えている。序論そして第一講から第八講まであり、第五講までは論駁、それ以降は、キリシタンの教義について述べられている。第二巻は、十戒、秘跡、死者の復活と最後の審判、楽園の栄光と地獄の刑罰について書かれている。

イエズス会士ロベス・ガイ師の論文から井手勝美氏は、このヴァリニャーノの「日本のカテキズム」が一般に使用されているような要理教育のための無信仰者と宣教師の対話形式のカテキズムではなく、「準備福音宣教」のために将来の伝道士及び宣教師用として編集された教理書であったと述べる。彼によると、ヴァリニャーノは日本の宣教初期において特殊なテーマを論ずる準備福音宣教（プレエバンヘリサシオン）と要理教育（カテケシス）を明確に区別していたというのである。日本はキリスト教に道を閉ざした新しき世界であると認識し、最初から一般的なカテキズムのごとくキリスト教の玄義を解説しても難しいと考えた。そこで準備として信仰に無関心な異教徒日本人に信仰問題を喚起し理解しやすい状態に整える必要があると感じたのである。そこで入門用公教要理として作成したのが「日本のカテキズム」であるというのである。⁶⁶⁾

(2) 「ドチリイナ・キリシタン」

さて、一方には「ドチリイナ・キリシタン」の存在がある。「ジヨルジュの公教要理」はカブラルをはじめ、何人かのパードレらの手によって書き換えられ、日本人により分かりやすいカテキズムへと編集されていった。それ

が、この「ドチリイナ・キリシタン」として出来上がっていくのである。

このカテキズム作成の頃、一五九〇年ヴァリニャーノがヨーロッパから帰国し、活字印刷機械を携えてきた。それを持って一五九一年にはさっそく日本人の「ドチリイナ・キリシタン」が印刷されたのである。一五九二年に長崎で開かれた「第一回日本管区会議」においてこの本は正式に認められ、以後、これまでに用いた数々のテキストの使用は禁止された。⁶⁷⁾ここに一応の翻訳、改訂の作業を終えたことが言えるのであろう。さらに一六〇〇年、再版されている。

序には以下のように書かれている。

御主ゼズキリシトご在世の間、み弟子達に教え置き給ふ事のうちに、取り分き教え給ふ事は汝達に教える如く、一切人間の後生を扶かる道の真の掟を弘めよとの御事なり、これ即ち学者達の宣ふ如く、三つの事に極まるなり。一つは信じ奉るべき事。二つには、頼もしく存じ奉るべき事。三つには、身持を以て勤むべきことこれなり⁶⁸⁾

ここにはキリスト教徒の生き方が書かれている。第一に信じること、第二に信頼して信仰生活を送ること、第三にはそれに値する生活を送ることである。それは神の使信を知って初めて可能になるのであり、それを知らせるために書かれている。この「ドチリイナ」の特徴は序に記載されているが、(1)言葉は平易に (2)教義は深く、がその方法論のポイントであった。また「師弟の問答」の形式をとって、単純で要点がつかみやすいように作られている。

以上の点から、日本におけるカテキズムには、大きく分けて二種類の流れがあったといえる。問答形式による平易な文章で構成されている「ドチリイナ・キリシタン」。そしてもう一方は、異教徒への論駁を含めた「日本のカテキズモ」。この違った用法のカテキズムの流れを整理したのは、ヴァリニャーノであったと考えられる。

(次にこの関連で、日本に入ってきた「ジョルジュの公教要理」⁹⁹が日本人の思想、状況などを加味して、どのように編集されてきたのかを見てみたいが、今回は紙面の都合上この部分を割愛させていただく。また筆者はここで、この「ドチリイナ・キリシタン」¹⁰⁰編集の過程で前述の「日本のカテキズモ」¹⁰¹の内容が具体的に影響を及ぼしているのではないかということ仮説として出した。そして卒論においては以下でそのことにも触れ、「日本のカテキズモ」と内容的にどのように重なっているかを見ながら、それが平行して作成され、用いられたことを明らかにしている。詳しいことは卒論を参照してほしい)

それらのことから、結論的に言えることは、「ドチリイナ」編集の背後には「日本のカテキズモ」の存在があり、それを補い合い、また助ける要素があったということである。なぜなら、直訳でなく日本の状況を加味していく時、それが俄のものでなく、これまでの編集の歴史を包含しているからである。また用いる時にもそれが平行して用いられていることが「ドチリイナ・キリシタン」の文章にも見られるのである。

VI、コンフラリアにおけるカテキズム教育

教理教育と共に、宣教の方策として積極的に取り入れたのは、コンフラリア（講組織）であった。このコンフラリアを中心に教理教育がなされていった様子を見ることが出来る。コンフラリア（Confraria）とは、キリシタン用語であり、ラテン語ではConfraternitasといわれる。各修道会士の指導によって平信徒が組織した布教と信仰を強化するための信心会であった。¹⁰²最初のころは、助け合い、奉仕グループとしての意味合いが強かったが、迫害の激化とともに、予想される迫害に備えての信仰強化グループとしての意味合いが強くなっていった。イエズス会の独占的宣教形態が崩れ、フランシスコ会、ドミニコ会、そしてアウグスチノ会などが来日してくる一五九〇年末から一六〇〇年末にかけては、信長が殺され、秀吉の天下となり九七年に伴天連追放令が出されて、その年、二六聖人殉教があり、その秀吉が翌年亡くなるという目まぐるしい状況の変化がある。一時、迫害は小康状態を迎えるに至った。状況はこのようであったが、信徒の信仰は強まり、宣教も破竹の勢いですすんでいった。その頃、至るところでコンフラリアは作られていった。¹⁰³このコンフラリアが迫害期をキリシタンが乗り切る大きな力となったことは、研究者が多く力説している。

コンフラリアは今日でいう「教会」のような機能を持っていき、¹⁰⁴そこで年間行事が行なわれ、毎日曜日のお勤めも決まっていた。¹⁰⁵「組頭」、「慈悲役」などと言われるリーダーが立てられ、教理書、信仰書によって教理を解説していた記録が多く見られる。これは、教理を徹底して理解した人はもちろん、むしろ無学な階層においては、ただ創造主の理解のみでパウチズモ（バプテスマ）を受けた者ももちろんいたであろうから大きな意味があった。彼らは洗礼の後に十分な教理教育を受ける必要があったからで、その点からもコンフラリアは大きな意味を持つていたとも言える。

そのコンフラリアが、徐々に迫害の中で村などの地縁・血縁と結びついていった。彼らにとつてその信仰を正しく子孫に伝えることは大きな責任であった。その信仰は、「カテキズム教育」を通して村ぐるみで守られ、伝えられていったのである。¹⁰⁶そしてそれが共同体としてのコンフラリアの存在自体を強固にしていった。さらに迫害が

激化しパードレたちは国外撤去を命じられ、潜伏しても司牧出来なくなっていく過程で、それぞれのコンフラリアの中で、具体的に奉仕者する人が選ばれ、その共同体は担われていくこととなる。ここではもともとカトリックが持っていた公同としての教会性が、コンフラリアという信仰共同体に、そして地縁・血縁にうまく反映していったのである。

VII、キリシタン時代におけるカテキズム教育の効果

キリシタンの人々は今日も存在する。一隠れキリシタン」と呼ばれる人々、また「離れキリシタン」と呼ばれてローマ・カトリックに復帰しないまま、それぞれの宗教を守っているグループもある。特に後者は真の土着化とは何であるのかを考えさせる現象である。ただ「日本教」になって融合し、シンクレティズム化してしまったのではないかという批評も少なくはない。しかし、これらの問題は、あの過酷な迫害下を二〇〇年も潜伏してきたその背景に負うところが多いと考えられる。説教を聞く機会もなくなり、信仰生活を日の当たるところで出来ず、地下に潜つての日々の中で、その教えが歪み、仏教等と交わってしまったことを、即、宣教方策の失敗と結論するのは出来ないように思う。

むしろ、大いに評価すべきなのは、信仰を理解し、最後まで弾圧に対抗し、殉教の血潮を流すまでに思想的に忠実であった名も知れぬ幾万の民衆が存在したことである。彼らはただ闇雲にキリシタン信仰を持っていたのではなく、かつた。当時文盲も多かつた中においても、ただ簡単に改宗させるだけでなく、最も低い身分にいる者にまで、その教理教育がなされ、それも徹底的になされていたことはこれまで見てきた通りである。彼らは知性においてそれ

を理解していたと言ってもよからう。ただし哲学的、抽象的思惟、特にスコラ哲学と真剣に対決するところまではいかず、初歩的な教理教育に留まっていたであろうことは、井手氏も指摘しているところである。しかしそれでもやはり井手氏は、そのような初歩的な教理教育であったとしても原理原則に従うことの不得手な日本人がその当時、信仰に生き、死に至るまで忠実であった事実は刮目すべきであると述べている。

その教理教育の背後には、きめの細かい宣教地理解に基づいた、宣教地本位のカテキズム作成がなされていた。それを以て、キリスト教の本質の徹底化をはかり、日本人個々の世界観の再構築を狙ったのである。また、カテキズム教育は宣教、信仰成長、信仰継承を網羅し、個々人の信仰を強化したのみならず、それ自身をもって教会形成をし、信仰共同体を強め、存続させる働きをなしたことを、コンフラリアの有様からも見る事が出来る。

VII、結論

宣教とは、ただみこばを時けば良いというものでもなく、個人が一人ひとり信じればそれでよいといったものではない。その地にあつて信仰共同体としての教会が、再臨を期待しつつその地で土着し、歩みを進めていくことが大切なのである。すなわち、信仰者は、神の前の一人の信仰者であると同時に、信仰共同体としての教会に加えられ、生かされ、育てられるという範ちゅうで見ていく必要があると考える。そうしないとどうしても信仰は個人化し、不明確になり、その内で消失してしまう。

以上、キリシタン時代の「カテキズム教育」を評価しつつ言えることは、最近の「カテキズム教育」離れは、教会の信仰共同体としての歩みの希薄さから来るものではないかということ、そしてそれがさらに信仰者個人の信仰

をも薄め、形骸化させているのではないかということである。教理はそれ自体が硬直化すると問題を持つが、キリシタン時代において、「カテキズム教育」を中心にしてイエズス会が日本にカトリック教会をたてあげていったように、また教理によってルター派教会が形成されていったように、絶えずその地、その時代に向けられてしやくし直され、教会において教育され、信仰告白され教会形成がなされていくならば、宣教的に大きな意味を持つものとなるのではないだろうか。このことが、公同の教会としての地位を回復させるものであるとも思う。

カテキズムは、教理であり信仰告白である。カテキズムが編集され、それが教育され、信仰告白として告白されるところに、教会はその位置を確かにする。カテキズムの存在、そしてそれが生きたカテキズムとしてそこに用いられる時、そこに一つの信仰、一つの教会が立ち上がるのである。まさにルター派教会が、社会的体裁や機構以前に、カテキズム教育によって「教育の教会」としての形をたてあげていったようである。日本の地に福音が土着していく為には、今の自分の生活にしっかりと密着した信仰告白をなす信仰共同体の存在が何より必要であるとも言えるのである。これは決して人間の側の集まりと理解するのではなく、神から与えられた信仰告白をなす聖徒の交わりとしての共同体である。それこそが、個人の信仰をたてあげ、根付かせていくことにも繋がるのである。

それゆえに今こそ教会に、本来の「カテキズム教育」の位置を回復しなければならぬ。それは、カトリックと分かれた宗教改革以降の世の流れである、個人中心主義一辺倒を見直し、個として神の前に立つ一人の信仰者であるという面と、神の民として再臨を待ち望む信仰共同体の一員としての信仰者であるという面の、両方のバランスを取り戻す教会的視点を確立し、今日の日本に教会をたてあげていくために、教会全体のわざとしての「カテキズム教育」が今こそ重要であるからである。

注

- (1) 「ローザンヌ宣教シリーズ23 名目上のクリスチャン」(関西ミッションリサーチセンター、一九八四年) 一八〇―二二頁
- (2) 清水紘一「キリシタン禁制史」(教育社、一九八一年) 三七頁
- (3) 葛井義憲「キリスト教土着化論キリシタン史を背景として」(朝日出版社、一九八〇年) 一一三―一二四頁
- (4) 海老沢有道ほか「キリシタン書／排耶書」(日本思想体系、岩波書店、一九七〇年) 五一五―五一八頁 海老沢有道「日本キリシタン史」(塙書房、昭和四七年) 二二―三七頁
- (5) 海老沢有道ほか「キリシタン書／拝耶書」(日本思想体系、岩波書店、一九七〇年) 五二〇頁
- (6) J・ロドリゲス「日本教会史・下」(大航海時代叢書、一九七〇年) 三二六―三二七頁 ザビエルは次のように述べている。「この日本の島には、われらの聖なる信仰が隆盛となるための素地が十分に備わっている。そして、われわれがその言葉話すことができるならば、多くのキリシタンが生まれるだろうということ、私は信じられない。われらの主なるデウスよ、願わくはすみやかにそれをわれわれに習得せしめたまえ。」このようなカ所が至るところに見られる。
- (7) 井間富二夫「世俗社会の宗教」(日本基督教団出版局、一九七二年) 二八二―二八三頁。19世紀、20世紀のプロテスタントミッションの気質をみる時に、そこに改革者意識、素朴な国家主義があると言われる。キリスト教文化に支えられた先進国民のエリート意識が見え隠れしている。初期宣教師の知識はわずかで、それを東亜

の实情に関する奇妙な無知その無知を補う情熱的な理想主義の混合と井門富二夫は位置づけている。さらに言えば、「説教」イデオロギー広布を目的とした、英語による説教の重視、それは後進国家の物質的実情と言語の相違をまったく無視した理想主義の実現であったのである。

- (8) J・ロドリゲス「日本教会史・下」(大航海時代叢書、一九七〇年)三二六―三二六七頁
- (9) 布教長カプラルについては、ヴァリニャーノの記述にもあるように、その宣教態度において日本人に対して決して好意的ではなかったことが明らかである。これをヴァリニャーノは激しく叱責している。ヴァリニャーノ「日本巡察記」(松田毅一訳、平凡社、一九九〇年)三〇三―三〇六頁
- (10) オルガンティーンの日本観形成には、彼が日本に滞在した時期に摂津の大改宗があったりして、多くの日本人がキリシタンとなったところであったという時代背景がある。ヴァリニャーノ「日本巡察記」(松田毅一訳、平凡社、一九九〇年)二九四―二九八頁
- (11) 尾原悟「日本におけるキリスト教の歩み」(上智大学キリシタン文庫、一九八四年)一一頁
- (12) イエズスのパードレたちが過激な宣教をしたのではないことが、祭りの取り扱いを見てもよく分かる。キリシタンたちは新年の祭りを異教の祭儀が結びついているとして、祭儀を取り除いても、あえて新年を祝おうとしなかった。したがって、異教徒たちが喜んで年始訪問をしても、まったく喜ばず、避ける態度を示した。そのことで異教徒たちは嫌悪し、キリシタンの教えが偏狭であるという印象を受けた。そのことに関して「これを知った巡察師は或る民族から古来の習慣を一掃することがいかに困難であるかを重視して、日本人キリシタンが異教の祭儀を混同することなく新年を祝う何らかの手立てを講ずるように望んだ。したがって巡察師は、古来の異教の汚れた祭礼を日本人キリシタンが今後忘れていくように、何か厳粛な(キリシタンの)祭礼をそ

の日に設けるように司祭に懇願したのであり、異教徒に固有のことをしなければ、デウスの掟は日本に新年を祝うことを禁ずるものではないことをキリシタンに公言する必要があると訴えた」と書かれている。「日本報告集第三卷」一九三頁

- (13) 井手勝美「キリシタン時代に於ける日本人のキリスト教受容」(キリシタン研究会 第一輯、キリシタン研究会、吉川弘文館、昭和四一年)一七八頁
- (14) 「十六・七世紀イエズス会日本報告集、第二卷」(松田毅一監訳、株式会社同朋舎出版、一九八七年)四三頁
- (15) 前掲書 五一頁
- (16) 前掲書 五三頁
- (17) 前掲書 九六頁
- (18) 前掲書 一七四―一七五頁
- (19) フロイス「日本史六」(松田毅一ほか訳、中央公論社、昭和五三年)二〇八頁
- (20) 前掲書 三二二頁
- (21) 「日本史八」(フロイス、松田毅一ほか訳、中央公論社、昭和五三年)一三頁 教会からの返事として次のような返事がされたことが記述されている。「まず、できうる限り十分心して、デウスのことを自らの救いとして順序を追って聴聞なされるように。というのは(教会としては)まず、洗礼志願者が聞くことになっている。教理の説教を聞き終えない限り、何びとにも洗礼を授けないことになっているからである」。
- (22) 葛井義憲「キリスト教土着論―キリシタン史を背景として」(朝日出版社、一九八〇年)四四―四七頁
- (23) フロイス「日本史七」(松田毅一ほか訳、中央公論社、昭和五三年)一〇頁

- (24) フロイス「日本史六」(松田毅一ほか訳、中央公論社、昭和五三年)二八三頁
- (25) H・チーリスク「キリシタン要理」(岩波書店、一九八三年)三三四頁
- (26) J・ロドリゲス「日本教会史・下」(大航海時代叢書、一九七〇年)三六五頁。フロイス「日本史六」(松田毅一ほか訳、中央公論社、昭和五三年)二九〇頁。ザビエルは、二名の同僚と三人の日本人キリシタンと共に、インドを出発し、日本に向かったが、マラッカに着く以前に、その日本人たちに教理を教え、「どの祈りが一番好きで霊的な慰安を感じるか」と聞いている。また、しばしば「私たちの教えの中で何が最もよいか」と尋ねている。そのようにして、ザビエルはただ教理を伝え、教えるだけでなく日本人の受けとめ方を知り、教える内容について吟味をしているのを見るのである。
- (27) J・ロドリゲス「日本教会史・下」(大航海時代叢書、一九七〇年)三六六頁。フロイス「日本史六」(松田毅一ほか訳、中央公論社、昭和五三年)一八八頁
- (28) フロイス「日本史六」二四六頁
- (29) H・チーリスクなど「キリシタン要理」(岩波書店、一九八三年)後ろから一〇二七頁
- (30) ロドリゲスは「日本教会史・下」において、カプラルの持参した詳しい公教要理について次のように述べている。「このパードレは信仰の玄義について詳しい公教要理を著わし、同時に異教徒の諸宗派に反論を加えた。これが現在まで普通に行なわれているものである」J・ロドリゲスは、「日本教会史・下」(大航海時代叢書、一九七〇年)三六六頁。ロドリゲスは、一六三四年頃死亡しているのでそれ以前の時期として特定してもよいであろう。
- (31) フロイス「日本史七」二二二頁
- (32) 前掲書 一五七頁。「別の折(嫡子)はフランシスコ・カプラル師とルイス・フロイス師を呼び、(前回)と同様に、夫人の前で彼らを夜半(過ぎ)の二時か三時まで引き留めて、デウスのことを聴聞した。兩人は(司祭たちが)上品で洗練された日本語をもって特別に用意した講義を、とりわけ喜んだ。その講義の中では、神や仏の欺瞞と、デウスの教えの真正さが簡略に述べられた。(嫡子は)その話の後、それらを日本の文字で書き写してもらいたい、(また)自分用と、家臣に教えるために、教理の解説も同様に(写して)ほしいと依頼した」と書かれている。
- (33) ヴァリニャーノ「日本巡察記」(松田毅一訳、平凡社、一九九〇年)二五六頁
- (34) フロイス「日本史七」(松田毅一訳、中央公論社、昭和五三年)三二九―三三〇頁 「さらに巡察師は、日本の宗派のことに精通した幾人かの日本人の協力を得て、よく整い、かつ群細な教理書(Cathecismo)を作成した。それは、本書によって新たな改宗者に対して(教えを説くため)のみならず、修道士たちがさらにより深く教理に通じ、異教徒に教えを説くにあたって、我らの聖なる信仰の教えについて、より明るく啓発されているようにするためであった」と書かれている。
- (35) フロイス「日本史三」(松田毅一訳、中央公論社、昭和五三年)二二二頁
- (36) ヴァリニャーノ「日本巡察記」(平凡社、一九七三年)三三九頁
- (37) 二月一四日付けの会議録の第五条に以下の文がある。「ドチリイナ・キリシタン」の祈りと問答は今まで色々と日本語に翻訳されたが、日本人修道士は彼らの言葉をよく知らず、神父たちもまたこの新しい国語の翻訳が十分に出来たか否かについてよく判断することができなかった。しかしこのたび日本語に精通して来た神父たちと日本人の修道士たちによってすべてにわたって審査された上で、巡察師の命令に依り「ドチリイ

ナ・キリシタン」が日本の活字で印刷された。この書は日本全国に使用されるべきものである。キリシタンに大きな利益をもたらすにちがいない。そこで、この地の全キリシタン団統一のため、この印刷された「ドチリイナ・キリシタン」と異なる翻訳の祈りや問答は、これ以後教えられないように、巡察師から規定を出したほうがよいと、この管区会議は勧告をする。……」。

- (38) 「十六・七世紀イエズス会日本報告集 第二卷」五一―五二頁
- (39) 日・チーリスクほか「キリシタン要理」(岩波書店、一九八三年) 後ろから一―二七頁
- (40) 海老沢有道ほか編「キリシタン教理書」(教文館、一九九三年)
- (41) ヴァリニャーノ「日本のカテキズモ」(天理図書館、昭和四四年)
- (42) カトリックにおける組講については「教会法」七〇七条一項により「信心及至キリスト教的慈善事業と並んで、なお条規上公けの祭式を高めることに寄与せんとする教會的団体」と規定している。助野健太郎「キリシタンの信仰生活」(聖パウロ修道会、昭和三二年) 一三一―一五頁
- (43) 「十六・七世紀イエズス会日本報告集、第一卷」(松田毅一監訳、株式会社同朋舎出版、一九八七年) 二三五―二三六頁 同書の二二九頁には、「諸々の信心会と信徒会(これらについては別な箇所で記したように、キリシタンたちはそれぞれに分かれて入会している)は、この迫害期間を通じてすばらしい熱心さと愛徳をもって進展し、新しいキリシタンたちの入会とともに日一日と増大している。そのため日曜日には、一人の修道士は昼食をとる前に、互いに相当離れている二ヶ所において説教せねばならぬほどである。そのため或る時には、すでに説教の職務を十分に訓練された年長の同宿たちさえこの収穫のために派遣されている」と書かれている。
- (44) 「十六・七世紀イエズス会日本報告集、第二卷」(松田毅一監訳、株式会社同朋舎出版、一九八七年) 二二三

九頁には、「そこでこの諸信心会は、迫害時にはあたかも我らの教会のようであり、そこにおいて説教が行なわれたり、諸秘蹟が執行されている」とある。

- (45) 「十六・七世紀イエズス会日本報告集、第一卷」(松田毅一監訳、株式会社同朋舎出版、一九八七年) 二二三―二三六頁 海老沢有道「日本キリシタン史」(塙書房、昭和四一年) 一六九―一七〇頁
- (46) 木場田直「キリシタン農民の生活」(羣書房有限会社、一九八六年) 八七―九五頁
- (47) 筆者はあくまで信仰は、「教義に賛成」ではなく、「福音に対する信頼」であるという立場に立つことを明記したい。

(西日本福音ルーテル・青谷教会・伝道師)

文献表

日本語文献

- 姉崎 正 治「一切支丹宗門の迫害と潜伏」同文館 大正14年
- 姉崎 正 治「一切支丹伝道の興廢」国書刊行会 昭和51年(昭和5年)
- 姉崎 正 治「一切支丹迫害史中の人物事蹟」国書刊行会 昭和51年(昭和5年)
- 井手 勝 美「キリシタン時代に於ける日本人のキリスト教受容」『キリシタン研究第十一輯』キリシタン文化研究会 昭和41年
- 井 門 富二天「世俗社会の宗教」日本基督教団出版局 1972年

- ヴァリニャーノ「日本巡察記」東西交渉旅行記全集 桃源社 昭和40年
 ヴァリニャーノ「日本のカテキズム」家人敏光訳編 天理図書館 昭和44年
 ヴォルター・エルトン「キリスト者の世界観」聖恵授産所出版部 1989年
 海老沢 有道「キリシタン南蛮文学入門」教文館 1991年
 海老沢有道ほか「キリシタン書／排耶書」日本思想体系 岩波書店 1970年
 海老沢 有道「キリシタンの弾圧と抵抗」雄山閣選書 昭和56年
 海老沢 有道「日本キリシタン史」塙書房 昭和47年
 海老沢 有道「増訂 切支丹史の研究」新人物往来社 昭和46年
 海老沢有道ほか「日本キリスト教史」日本基督教団出版局 1990年
 海老沢 有道「キリシタンの信仰事情」『国民生活史研究第四集』吉川弘文館 昭和38年(35年) pp.477-506
 海老沢有道・井手勝美「キリシタン教理書」株式会社教文館 1993年
 岡田 章雄「南蛮習俗考」地人書館 昭和18年
 岡田 章雄「キリシタン大名」歴史新書86 教育社 1988年
 オランダ司教団「新カトリック教理」ブラッセル・J・ヴァンほか訳 エンデルレ書店 昭和46年
 オルファネール「日本キリシタン教会史 1602-20」井手勝美訳・ホセ・デルガト・ガルシア註 雄松堂書店 昭和52年
 尾形 裕 康「日本教育通史研究」早稲田大学出版部 昭和56年
 尾原 悟「キリシタン版について」上智大学キリシタン文庫

- 尾原 悟「殉教と復活」上智大学キリシタン文庫 1985年
 尾原 悟「イエズス会日本関係文書について」上智大学キリシタン文庫 1977年
 尾原 悟「外なるもの」への意識」上智大学キリシタン文庫 1980年
 尾原 悟「受容・拒絶・触発」上智大学キリシタン文庫 1978年
 尾原 悟「日本におけるキリスト教の歩み」上智大学キリシタン文庫 1984年
 尾原 悟「日本の歴史的風土とキリスト教」上智大学キリシタン文庫 1979年
 カイバー・R・B「聖書の教会観」聖山社 1989年
 ダイ・マンス・ロクシ「キリシタン史上の信徒使徒職組織」『キリシタン研究 第十三輯』キリシタン文化研究会 昭和45年
 カスタニエダ・J「イエズス会教育の心」みくに書房 1993年
 片岡 弥 吉「日本キリシタン殉教史」時事通信社 昭和54年
 加藤 常 昭「雪ノ下カテキズム」教文館 1990年
 金子 晴 勇「ルターとその時代」玉川大学出版部 1985年
 木場田 直「キリシタン農民の生活」葦書房有限会社 1986年 (1985年)
 グラープマン・M「カトリック神学史」創造社 昭和46年
 光 明 社「子どものカトリック要理」昭和40年
 榊原 悠 二「日本切支丹の歴史的作用」伊藤書店 1949年
 清水 絃 一「キリシタン禁制史」歴史新書109 教育社 1991年

- 上智 大学「キリシタン」『カトリック大辞典』富山書房 昭和15年
 スエドランプ・ロウ「神の救いの道」岸井敏訳 聖文舎 昭和32年
 助野 健太郎「キリシタンの信仰生活」聖パウロ修道会 中央出版社 昭和32年
 助野健太郎ほか「キリシタンと鎖国」桜風社 昭和49年
 葛井 義 憲「キリスト教土着化論」キリシタン史を背景として」朝日出版社 1980年
 高瀬 弘一郎「キリシタンの世紀」岩波書店 1993年
 チーリスク・H「サヴィエルの教理説明」初代キリシタンの宣教に関する一考察とその資料」『キリシタン研究 第十五輯』キリシタン文化研究会 昭和49年
 チーリスク・H「芸術キリシタン史料」吉川弘文館 昭和43年
 チーリスク・H「日本における最初の神学校 1601-1614年」『キリシタン研究 第十輯』キリシタン文化研究会 吉川弘文館 昭和40年
 チーリスク・Hほか「日本イエズス会版 キリシタン要理」岩波書店 1966年
 新村 出「日本吉利支丹文化史」地人書館 昭和17年（16年）
 バジエス・レオン「日本切支丹宗門史・上巻」クリセル神父校閲 吉田小五郎訳 岩波文庫 1991年
 バジエス・レオン「日本切支丹宗門史・中巻」クリセル神父校閲 吉田小五郎訳 岩波文庫 1991年
 林徳衛ほか「彦岐島キリシタン史料」島の科学研究所 昭和63年
 バンダス・ルドルフ「カトリック要理教授法」山中巖彦訳 エンデルレ書店 昭和36年
 比屋根 安 定「吉利支丹迫害史」東方書院 昭和8年
- ヒロン・アピラ「日本王国記」大航海時代叢書 岩波書店 1973年
 古野 清 人「隠れキリシタン」日本歴史新書増補版 至文社 昭和47年
 フロイス・ルイス「日欧文化比較」大航海時代叢書 岩波書店 1973年
 フロイス・ルイス「日本史1」松田毅一訳 中央公論社 昭和52年
 フロイス・ルイス「日本史2」松田毅一訳 中央公論社 昭和53年
 フロイス・ルイス「日本史3」松田毅一訳 中央公論社 昭和53年
 フロイス・ルイス「日本史4」松田毅一訳 中央公論社 昭和53年
 フロイス・ルイス「日本史5」松田毅一訳 中央公論社 昭和53年
 フロイス・ルイス「日本史6」松田毅一訳 中央公論社 昭和53年
 フロイス・ルイス「日本史7」松田毅一訳 中央公論社 昭和53年
 フロイス・ルイス「日本史8」松田毅一訳 中央公論社 昭和53年
 松田毅一ほか「日本関係イエズス会原文書」京都外国語大学付属図書館所蔵 株式会社同朋舎出版 1987年
 松田毅一「十六・七世紀イエズス会日本報告集 第1巻」同朋舎出版 1987年
 松田毅一「十六・七世紀イエズス会日本報告集 第2巻」同朋舎出版 1987年
 松田毅一「十六・七世紀イエズス会日本報告集 第3巻」同朋舎出版 1988年
 松田毅一「十六・七世紀イエズス会日本報告集 第4巻」同朋舎出版 1988年
 松田毅一「十六・七世紀イエズス会日本報告集 第5巻」同朋舎出版 1988年
 松田毅一「十六・七世紀イエズス会日本報告集 第1巻」同朋舎出版 1990年

宮本常一「庶民の発見」講談社 1987年

百瀬文晃ほか「聖書に見る教育の原点」中央出版社 1992年

山本七平「受容と排除の軌跡」主婦の友社 昭和53年

ラウレス・ヨハネス「筑前・筑後のキリシタン」『キリシタン研究第六輯』キリシタン研究会 昭和36年 pp.3-82

ラウレス・ヨハネス「日本カトリック教会史」中央出版社

ルター・M「大教理問答書」福山四郎訳 ルーテル文書協会 昭和32年

ロドリゲス・シヨアン「日本教会史・上」大航海時代叢書 岩波書店 1967年

ロドリゲス・シヨアン「日本教会史・下」大航海時代叢書 岩波書店 1970年

外国語文献

Evangelical Catechism : Christian Faith in the World Today. American edition. Minneapolis:Augsburg Publishing House, 1982